

『中の根本の言葉を章とした知慧（根本中論）』

（第十九章）

現在起こった時と未来が、  
もし過去に相對したならば、  
現在起こった時と未来は、  
過去時に有ることになる。 1

現在起こった時と未来が、  
もしそこに無いとなれば、  
現在起こった時と未来は、  
如何様にそれに相對したとなろうか。 2

過去に相對しておらず、  
その二つが成立したことは有るのではない。  
それ故に、現在起こった時と、  
未来の時も有るのではない。 3

過去に相對しておらず、  
その二つが成立することは有るのではない。  
それ故に、現在起こった時と、  
未来の時も有るのではない。(仏)

まさしくこの順次の論法によって、  
残りの二つの錯誤と、  
上と下と中等や、  
一等についても知りたまえ。 4  
留まらぬ時を、捉えることはしない。  
捉えられる対象である時が、  
留まることは、有るのではないので、  
捉えられていない時が、如何様に名付けられようか。 5

留まらぬ時として、捉えることはし  
ない。捉えられる対象である時が、  
留まることは、有るのではないので、  
捉えられていない時として、如何様  
に名付けられようか。(仏)

もし、時が事物に依拠した（ならば）、  
無事物の時は、何処に有ろうか。  
如何なる事物も有るのでなければ、  
時を見て、有ると何処でなろうか。 6

「時を考察する」という第十九章である。

（第二十章）

もし、諸々の因と縁の、  
集合そのものより生じるとなり、  
集合に果が有るならば、  
如何様に集合そのものより生じようか。 1

もし、諸々の因と縁の、  
集合そのものより生じるとなれば、  
集合に果が有るならば、  
如何様に集合そのものより生じようか。(仏)

もし、諸々の因と縁の、  
集合そのものより生じるとなり、  
集合に果が無ければ、  
如何様に集合そのものより生じようか。 2

もし、諸々の因と縁の、  
集合そのものより生じるとなれば、  
集合に果が無ければ、  
如何様に集合そのものより生じようか。(仏)

もし、諸々の因と縁の、  
集合に果が有るならば、  
集合に認められる対象として有るべきであるが、  
集合そのものに認められる対象として無い。 3

もし、諸々の因と縁の、  
集合に果が無ければ、  
諸因や諸縁も、  
因縁でないと等しくなる。 4

もし、因が果に、  
因を与えて滅すとなれば、  
与えた分と滅した分の、  
因の我性は二つとなる。 5

もし、因が果に、  
因を与えずに滅すとなれば、  
因が滅してから生じた  
その果は無因となる。 6

もし、集合と一緒に、  
果も生じるとなるならば、  
生じさせるものと生じさせられるものが、  
同時である背理となる。 7

もし、集合と一緒に、  
果も生じるとなるならば、  
生じさせるものと生じさせられたものが、  
同時である背理となる。(仏)

もし、集合の以前に、  
果が生じたとなれば、  
諸々の因と縁の無い  
無因の果が起こるとなる。 8

もし、因が滅して、果に  
因が全く移行すとなれば、  
以前に生じた因も、  
再び生じる背理となる。 9

滅し消えたものが、  
生じた果を如何様に生じさせようか。  
果と関係する、  
留まる因も、如何様に生じさせようか。 10

もし、因果が関係していなければ、  
如何なる果を生じさせようか。  
因は、見ても見ておらずとも、  
果を生じさせることはしない。 11

過去となる果は、過去となる因と、  
生じていない因と、生じた因と、  
一緒に接したとなることは、  
いつ時にも有るのではない。 12

生じた果は、生じていない因と、  
過去の因と、生じた因と、  
一緒に接したとなることは、  
いつ時にも有るのではない。 13

生じていない果は、生じた因と、  
生じていない因と、過去の因と、  
一緒に接したとなることは、  
いつ時にも有るのではない。 14

接したことが有るのでなければ、  
因が果を、如何様に生じさせようか。  
接したことが有るとしても、  
因が果を、如何様に生じさせようか。 15

仮に果が欠如する因が、  
如何様に果を生じさせようか。  
仮に果が欠如しない因が、  
如何様に果を生じさせようか。 16

空でない果は、生じるとならない。  
空でないものは滅すとならない。  
空でないそれは、滅しておらず、  
生じていないともなるのだ。 17

空が如何様に生じるとなり、  
空が如何様に滅すとなろうか。  
その空も、滅しておらず、  
生じていない背理ともなる。 18

因と果がまさしく同一であるとは、  
いつ時も合理とはならない。  
因と果がまさしく他であるとは、  
いつ時も合理とはならない。 19

生じていない果は、生じていない因と、  
過去の因と、生じた因と、  
一緒に接したとなることは、  
いつ時にも有るのではない。(仏)

生じた果は、生じた因と、  
生じていない因と、過去の因と、  
一緒に接したとなることは、  
いつ時にも有るのではない。(仏)

接したことが有るのでなければ、因によつ  
て果が、如何様に生じさせられようか。  
接したことが有るとしても、因によつて果  
が、如何様に生じさせられようか。(顛)

因と果がまさしく同一であれば、  
生じさせられるものと生じさせるものが、まさしく同一となる。

因と果がまさしく他であれば、  
因と因でないものが等しくなる。 20

果が自性として有るならば、  
因が何を生じさせようか。  
果が自性として無ければ、  
因によって何が生じさせられるとなろうか。 21

生じさせるものでなければ、  
因そのものは合理とはならない。  
因そのものに合理が有るのでなければ、  
果は何のものであるとなろうか。 22

諸因と諸縁による、  
集合であるそれによって、  
我が我性を生じさせなければ、  
果を如何様に生じさせようか。 23

それ故に、集合が為したことは無い。  
集合でないものが為した果は無い。  
果が有るのでなければ、  
縁の集合が何処に有ろうか。 24

因と果がまさしく同一であれば、生じさせられるものと生じさせるものが、同一となる。因と果がまさしく他であれば、因と因でないものが等しくなる。(20・顕)

因と果がまさしく同一であれば、生じさせるものと生じさせられるものが、同一となる。因と果がまさしく他であれば、因と因でないものが等しくなる。(20・仏)

果が自性として有るならば、  
因が何を生じさせようか。  
果が自性として無ければ、  
因が何を生じさせるとなろうか。(21・中デ)

果が自性として有るならば、因によって何が生じさせられるとなろうか。

果が自性として無ければ、因によって何が生じさせられるとなろうか。(21・顕)

諸因と所縁の、集合であるその、  
我が我性を生じさせなければ、  
果を如何様に生じさせようか。(23・顕)

それ故に、集合が為したことと、  
集合でないものが為した果は無い。  
果が有るのでなければ、  
縁の集合が何処に有ろうか。(24・仏)

それ故に、集合が為したことと、  
集合でないものが為した果ではない。  
果が有るのでなければ、  
縁の集合が何処に有ろうか。(24・顕)

「集合を考察する」という第二十章である。

※(中)は、『根本中論』新訳(チョクロ訳)で、蔵比較編集版と異なる記述。デ=デルゲ版。

(仏)は、『根本中論』チョクロ訳(『ブッダパーリタ』に引用された旧訳)で、パツァブ訳(新訳)と異なる記述。

(顕)は、パツァブ訳(新訳)ではあるが、『根本中論』本論と記述が異なる『顕句論』で引用された偈を示す。